



あの日を語り継ぐ

八月九日、他県の学校は、登校日ではなく、平和学習集会が行われるでもなく、淡々と夏休みの一日が過ぎていきます。

「長崎のことは、長崎にいる私たちが引き継がなければ、消える。」

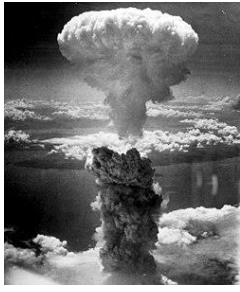
そのような危機感が、少しだけ和らいだ経験を数年前にしたことがあります。

その日、長崎を離れて出席した福岡県での教育研究大会の冒頭、主催者が次のように話してくれました。

「本日は、長崎原爆の日です。一九四五年の今日、多くの犠牲者が出ました。その時刻になったら、皆がどういっしょに黙祷をささげたと思います。よしくお願います。」

広島の人々にとっての八月六日。
沖縄の人々にとっての六月二十三日。
日本人にとっての八月十五日。

それぞれの想いを心に受け止めて、
「平和」実現への願いをつなぐ今日、
七十八年目の夏、
長崎原爆の日です。



長崎から世界へ

長崎から一人ひとりの心へ

戦後七十八年、世代交代が進む中、左の骨子に基づいて編成された平和宣言文が読み上げられました。

令和五年 長崎平和宣言（骨子）

- 被爆者のエピソードを通じ、被爆の実相を伝えるとともに、原爆を肯定する風潮への警告
- G7広島サミットで核戦争をしない意思が再確認された意義とともに、核抑止力を前提とした考えへの批判と「核兵器をなくすしかない」という認識喚起の訴え
- 核保有国と核の傘の下にいる国に対し、核抑止への依存から脱却し、人間の安全保障の考えのもと、核兵器廃絶への道を着実に進むよう要請
- 日本政府と国会議員に対し、核兵器禁止条約への署名・批准等の要請、憲法の平和の理念に向けた外交努力の要請
- 市民社会が行動することの重要性の訴え及び行動を起こすよう呼びかけ
- 日本政府に対し、被爆者援護の充実と被爆体験者救済の要請
- 原爆犠牲者への追悼と、世界の人々との連帯により核兵器廃絶・恒久平和実現に向け力を尽くすことへの決意表明

ウクライナ関連事態の中で「核兵器」という言葉を使う指導者のニュースをよく聞くようになりました。実際の恐ろしさを知る長崎県民として、この日に対する想いを語り継ぐ使命を感じています。

《コラム 港町ブルース》

「できること」はある

「ミッションインポッシブル・ゴーストプロトコル」(アクション映画)の危機的場面の中に、主人公イーサン・ハントの一言が、武器密売人の考えを変えさせる場面があります。

「ヤツは、核戦争を考えている。」

この一言で態度を一変させた武器密売人は「ヤツ」の秘密をばらし、イーサンに協力する：核戦争は、誰の得にもならない！と、監督のJJ・エイブラムスは脚本に書き込みました。

こんなところにもメッセージがある。

どんな立ち位置でも「できること」はあるとトム・クルーズの名演に心高ぶらせる単純な私です。



《 主な行事予定 》

- 《 8月 》
- 9日（水）授業日、平和集会（給食なし）
県民祈りの日
 - 10日（木）学校閉庁期間 ～8月15日
 - 21日（月）課題実力テスト（全学年）
～22日（給食なし）
 - 23日（水）3年生授業日 ～24日
漢字検定（希望者）（給食なし）
 - 26日（土）数学検定（希望者）
- 《 9月 》
- 1日（金）始業式（給食あり）
 - 4日（月）身体測定
 - 5日（火）自転車点検
 - 12日（火）職場体験学習 ～13日
（2年生、要 弁当）
 - 14日（木）教育相談 ～28日

《心に響いた言葉》 九州大会出場者市長激励会に参加した時の松尾君（3年生）と福田君（1年生）の座る姿勢。（今回は“姿”） “卒業式並み”に手を両ひざの上で軽く握って動かさず、表情も良く、凛とした姿でした。

シリーズ「教育を取り巻く社会の動向」

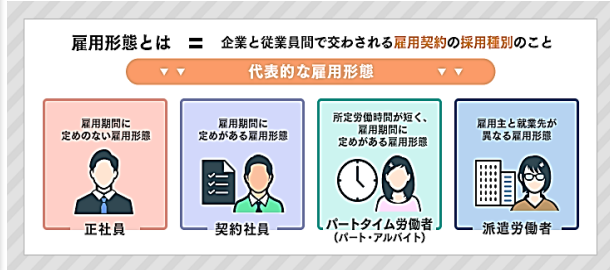
長崎県教育振興基本計画から

〈第五回〉

経済・

雇用環境の変化

今回は「仕事」のことです。生徒たちも将来は何かしらの仕事に就かなければならないのですが、社会の変化が激しいので、中学生であっても、その状況を知ることが、高校を選ぶ上で、重要だと考えています。



我が国の(中略)雇用情勢は着実に改善傾向にあります。本県においても景気が緩やかな回復基調にある中、県内の多くの企業において人手不足感が強い状態が続いています。

一方、グローバル化やICTをはじめとする技術革新の進展による企業を取り巻く競争環境の変化や、終身雇用等のかつての雇用慣行が変容する中、雇用形態が多様化し、パートタイム、派遣社員など、非正規雇用の割合は依然として高い状態にあります。

〈長崎県教育振興基本計画から〉

「仕事を選ぶ」には、その仕事の種類や内容だけでなく、雇用形態(右側下の図)や福利厚生、資格の要・不要、試験のある・なし等の他、「どこで」という大きな要素があります。

〈ここで、中学校(本校)では〉

もう何年も前から、経済の現場にいる人や識者の方々からよく聞く言葉があります。

「いい学校(高校や大学等)を出ても、将来は約束されない。」

これは、進学しなくてもいいと言っているのではなく、その学校で「何を身につけるか」ということが大事で、学校を出ても「学び続ける」または「チャレンジし続ける」ことが重要だということです。

一方、ある研究者は「子ども達が大人になる頃、今ある仕事の半分くらいがなくなり、今は無い多くの新しい仕事が生まれている。」という趣旨の言葉を残しています。このことから言えるのは、しっかりと「情報」をつかんでいくことが重要だということです。

そして、(紙面の都合で)もう一つだけ。問題は「どこで」です。「都会に出たい」という想いは若者にはありますが、そこでの生活が幸せかどうかは価値観が決めることです。家族といっしょに(または近くに)住むことに幸せを感じるかどうかもまた同じ。(美は、私もその問題の渦中입니다。)

これら以外にも「仕事」選びには、たくさん要素が入り混じりますが、その選択の第一歩が「高校選び」です。三年生になると二学期が終わる頃、その決断をすることになります。しっかりとサポートしていきたいと思えます。



ふるさとの文化・歴史・人物 — 口之津中教育の視点から

古野清孝・清賢

「五十年前、ある装置が漁業を革命的に変えた。」

これは、古野御兄弟とその御家族等の奮闘を描いたプロジェクトX(NHK、平成十三年七月三日放送)の冒頭のナレーションです。田口トモロヲさんの独特の語り口と、地元出身の方のお話、そしてその番組が放送された頃、新上五島町の学校に勤務していたこともあって、誇らしさを感じたことを覚えています。

古野電気事業ターマ

「見えないものを見えるようにする。」

その想いは今や海中や海上だけでなく、地殻変動や人々の健康状態へと広がっているとのこと。

本市発足時から行われている「古野賞科学技術展」は、この開拓者精神を引き継いでいます。来たれ、若人！ 未来を創ろう。



【「閉庁期間」のお知らせ】

八月十日(木)～十五日(火)は、学校の働き方改革の一環として「閉庁日」となり、部活動を実施しないだけでなく、教職員も学校に出勤しません。

御理解と御協力を
お願ひします。

